

東日本支部だより

2008年5月20日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

定例研究会のお知らせ

◆東日本支部第38回定例研究会

時 2008年6月7日(土)午後2時～4時50分

所 国立音楽大学 1号館120教室

*西武新宿(拝島)線・多摩都市モノレール

玉川上水駅より徒歩8分

*構内については以下のURLをご参照ください。

<http://www.kunitachi.ac.jp/info/campus.htm>

○研究発表(博士論文)

1.山本華子(東京芸術大学大学院)

李王職雅楽部の研究

—植民地時代朝鮮の宮廷音楽伝承—

2.小澤由佳(日本大学大学院)

三代目杵屋正治郎研究

—劇界近代化の中での軌跡—

3.濱崎友絵(東京芸術大学大学院)

トルコにおける「国民音楽」の成立

4.中西沙織(東京芸術大学大学院)

能における「わざ」の習得に関する研究

—事例分析からの学習プログラムの開発を通して—

司会:尾高暁子(東京芸術大学)

◆東日本支部第39回定例研究会

時 2008年7月5日(土)午後2時～4時

所 大東文化大学 大東文化会館 1階ホール

東京都板橋区徳丸2-4-21 TEL: 03-5399-7399

*東武東上線 東武練馬駅 徒歩3分

*交通案内・地図については以下のURLをご参照ください。

<http://www.daito.ac.jp/exten/access.html>

○研究発表

「〈唱歌(しょうが)研究の射程〉」

発表者:山本宏子(岡山大学)

森田都紀(日本学術振興会)

金光真理子(埼玉大学)

司会:奥山けい子(東京成徳大学)

※詳細は6月にハガキでお知らせ致します。

定例研究会の報告

◆東日本支部第36回定例研究会

時 2008年3月15日(土)午後1時30～4時30分

所 お茶の水女子大学 共通講義棟2号館102教室

○2007 年度卒業論文発表(その1)

1.浅草サンバカーニバルにみる地域振興の変容

小山麻奈(桐朋学園大学)

(発表要旨)

本論文は、ブルデューの「差別化＝卓越化」の概念と「場」の概念を用いて、浅草サンバカーニバルという「場」の持つ意味合いの変容を分析するものである。

第一章では、浅草サンバカーニバルの成立事情やその発展を見ていく。浅草はかつて東京を代表する歓楽街であったが、戦後次第に廃れて行き、若者の足は他の町へと向かっていった。これに危機感を抱いた浅草の人々は、他の町から浅草を卓越化させる手段として浅草サンバカーニバルの開催を決めた。しかし次第に、浅草サンバカーニバルという「場」を構成する人々が変化した結果、卓越化の手段としてのカーニバルではなくなり、ただ単純に、サンバを愛する人が集まり、競い、楽しむ場となった。

第二章では、2007年8月25日開催の第27回浅草サンバカーニバルを取り上げ、当日のプログラム構成や、実行委員会、出場者の実態を調べていく。

第三章では、ブルデューの概念の適用によって、浅草サンバカーニバルという「場」の持つ意味合いの変容を見ていく。浅草サンバカーニバルは全国的に定着したことで、地域振興としての祭りではなくなり、「浅草」としての価値よりも、「サンバ」としての価値が上がってきている。

現在、浅草サンバカーニバルは様々な問題をかかえている。

第四章第一節では、「浅草サンバカーニバルへの参加条件の変化」、「浅草サンバカーニバルに携わる人の変化」、「浅草サンバカーニバルの目的の変化」という3つの変化を取り上げる。

また第四章第二節では、浅草サンバカーニバル全体として大きく見た時に見える「〈場〉の持つ意味合いの変化」、「〈

場〉のエネルギーの変化」、「浅草という地域における共同性が失われつつある」という変化を分析する。

結論では、浅草サンバカーニバルを継続する意義を考えていく。今や、浅草サンバカーニバルの運営は、活性化云々ではなく、義務であり、使命なのかもしれない。

(コメント・島添貴美子)

小山氏の研究は、P.ブルデューの「場」と「卓越化」の概念を使って、地域振興としての浅草サンバカーニバルの変容を分析したものである。このイベントは、「浅草」の卓越化をめざして始まったが、次第に外部のサンバチームが踊りを競い合うものとなり、浅草はいわば「日本のサンバの殿堂」へと変容した。フィールドワークとアンケート調査による分析によって、変容の裏付けが取れており、結論も明確である。その一方で、質疑応答でも指摘されたように、なぜブルデューの概念をもってきたのかという疑問が残った。なぜなら、ブルデューの「卓越化＝差異化」と表裏一体の概念である「同一化」が、この事例にないからである。質疑応答での小山氏の発言から察するに、浅草の人々にとっては、三社祭や時代祭こそが、浅草を意識する(同一化)、他の地域にはない(差異化)、浅草の誇り(卓越化)である。それに対して浅草サンバカーニバルは、塚田健一氏が指摘したようにサンバと地元の文化の接点を作らなかった。つまり、浅草という地域アイデンティティ(同一化)を生まずに卓越化してしまったイベントなのではないだろうか。

2.有東木(うとうぎ)の盆踊りの音楽的分析

上田友梨(東京芸術大学)

(発表要旨)

静岡市有東木^{うとうぎ}は静岡駅から安倍川沿いに33キロ程北上した標高500m～650mの斜面に展開する70戸、235人の山

村集落である。盆踊りは8月14日・15日に行われ、男踊り・女踊りに分かれており、全25曲が伝承されている。伴奏は男踊り・女踊りともに締太鼓ひとつで、歌は中世から近世初期に流行した小歌と歴史的に深い関係がある。灯籠を頭上に乗せて輪の中央で踊る、室町時代の風流の流れを汲む中踊りが出る。

本研究は、有東木の盆踊りの音楽を採譜して資料を作成し、音楽的な分析を行い、盆踊り全体の構成や各曲の構造を把握する試みである。採譜においては当事者の踊りの体験に即し、踊りの振りと太鼓のリズムを一拍の基準とした。

盆踊り全体の構成については、風流踊り歌に特徴的な歌で構成されており、全体が序破急の構成であるといえる。盆踊りの分析・分類の基準には「型」という概念を用いる。型は、踊りの振りと旋律・リズム・テンポ・囃子詞など、踊りと音楽の要素のセットを指す。盆踊り歌は、詞章が型に適宜入れ替えられて作られていた。全曲の踊りと音楽の要素から型を特定し、型の分類や全体の構成における型の順番から、重要視された型を明らかにする。

各曲の構造の分析においては、男踊りと女踊りそれぞれの形態に則した歌・太鼓・踊りの各要素の主従関係と太鼓の語法について考察する。男踊りは歌、女踊りは繰り返しの踊りにそれぞれ重きが置かれており、そのことが男踊りと女踊りの構造の違いに影響している。歌い手・踊り手・太鼓の打ち手の音楽活動の分担と主従関係も男踊りと女踊りで異なる。男踊りの曲の間奏部分の速い太鼓の拍子は、中踊りを踊らせるための拍子であったとわかった。太鼓の語法には、踊り手が採り物のササラやコキリコを奏するときや、特徴的な所作をするときのリズムとの対応がみられ、特に女踊りでは太鼓の周期は踊りの周期と深い関連があることを示す。

(コメント・島添貴美子)

採譜による音楽構造分析は、伝承がしっかりしているからこそ可能な方法であることを考えると、上田氏の研究は貴重な記録でもある。ただ、発表ではテンポ、型、太鼓のリズムを分析要素として取り上げた理由と、取り上げた要素間の関係の説明がなかったために、言いたいことが順を追って積み上げられず、最終的に有東木の盆踊りの音楽的特徴が何だったのか、分かり難かったことは否めない。しかし、質疑応答が加わることで、以下の点が明らかになったと思われる。まず、有東木の盆踊りは、男踊りと女踊りが数曲ずつ交互に踊られるが、男踊りは風流系、女踊りは盆踊り系で性格が異なる。盆踊り全体のテンポの配分に、序破急の要素が見られる。曲は、詞章、旋律等の音楽的要素の違いによって、儀礼的か娯楽的かどちらかに当てはまる。テンポ配分と曲の間の関係は、序は儀礼的な曲、破以降は娯楽的な曲である。

また、質疑応答で、本来、男女別である踊りを、性別を問わず両方とも習得しようという動きがあることもわかった。

3. 近世藩校における音楽の研究

井・まりこ(東京芸術大学)

(発表要旨)

本論文では、江戸時代に藩士の教育機関であった藩校で扱われていた音楽を取り上げた。一口に音楽と言っても、ここで扱っているジャンルは主に雅楽である。藩校で積極的に音楽が奏された儀式である^{せきてん}積奠(孔子を祀る儀式)を中心に、本論を進めた。

藩校の音楽を扱うことは、徳川幕府で式楽とされていた能楽や一部大名に親しまれていた雅楽が、それ以下の階層の人々にどう浸透していったかを考える上で重要である。藩校は藩の政治的理念が顕著に現れる場なので、各藩がどのように音楽を捉えていたのかを解明する手がかりになると思わ

れる。また、藩校という近世の教育現場で実施されていた音楽を明らかにしていくことで、和楽器実技が義務づけられている今日の音楽教育現場の参考になる部分も見えてくるのではないか。

本論文では、第1章でまず各藩の規範ともなったと言える幕府の昌平坂学問所での積奠について触れた。ここでは寛文4(1664)年2月の積奠から奏楽が行われ、年によっては曲目が明らかになった。第2章からは、1800年代に入ってから音楽科目を置いた藩校4校(佐倉藩成徳書院、萩藩明倫館、水戸藩弘道館、長府藩敬業館)を、資料の豊富な順に扱った。佐倉藩成徳書院では書院内の音楽所で雅楽の稽古を行い、幕末には同じ書院内の兵学所で西洋式の軍楽教習も行われていた。萩藩明倫館では、月に3回、音楽会という勉強会を開いて音楽稽古を行い、積奠の際にはその学生たちが奏楽を担当していた。稽古の際に使用されたと思われる楽譜があったこともわかった。水戸藩弘道館では、音楽教科は選択制であったが、大曲に数えられている《蘇合香》を奏するなど、密度の濃い練習が行われていた。また、他藩藩校では見られない謡を行っていた。長府藩敬業館の積奠では幕府の積奠でも見られない《抜頭》が奏されていた。

最後に学問所と各藩校を比較し、今後の課題を挙げ、本論文を結んだ。

(コメント・前原恵美)

本発表では藩校の音楽教科、特に積奠を軸とした雅楽の扱いに注目し、4つの藩校を取り上げ、各藩独自の組織やカリキュラムによる教育が行われていたことが報告された。

フロアからは、音楽教科を設置した藩校の政治的・経済的背景や、取り上げた4校の設立時期が集中している理由等について質問があった。また、藩校の音楽教育が後世に繋がる事例として、塚原康子氏から、松代藩で雅楽を学んだ宮

島春松の弟・一条慎三郎が、兄の勧めで東京音楽学校で学んだ後、台湾で国語学校教師として唱歌教育に関わったとの発言があった。ほかに蒲生美津子氏から、積奠という儀式の中で音楽を捉えていることから、背景に礼楽思想の導入があったのではないかという指摘があった。

本研究は、藩校の音楽教育が社会情勢の分析に新たな切り口を提示したり、日本近代化に及ぼした波紋を探る上でさらなる可能性を秘めていると感じた。藩校の音楽教科に特化した研究がほとんど皆無の中、独創的な着眼点を活かし、分析対象を広げての成果が待たれる。

4. 明治・大正期少女雑誌にみる「音楽」と女学生

—『少女の友』を中心に—

松原 恵(東京芸術大学)

(発表要旨)

本論文は、明治・大正期における女学生と音楽の関係を考察するものである。第一に、女学生のおかれた社会的状況と、その音楽体験を概観する。第二に、女学生の愛読した少女雑誌における音楽記事と音楽に関する言説を検討し、その音楽イメージを探る。

第1章では、前提たる明治期教育制度の変遷を追い、高等女学校の教育内容や課外活動等を確認した。明治32年の高等女学校令以降、高等女学校数と女学生数は増加するが、学課の内外で裁縫や家事、音楽等が重視されていたことがわかる。

高等女学校の思想的基盤たる良妻賢母主義について第2章で概観し、また女学生に対する世間的イメージがそこから外れた「墮落女学生」として作り上げられていたことも確認した。さらに、女学生の音楽体験を検討した。すなわち、教科としての音楽体験と、稽古事としての音楽体験である。唱歌教育や楽器の稽古事を通じて、女学生は音楽に親しんだ。

第3章以降では少女雑誌を扱う。第3章でその成立、読者、内容等を概観した。「墮落」のイメージから女学生を脱却させ、清純な「少女」イメージを掲げて少女雑誌は創刊された。その特徴はとりわけ投稿制度にあった。各誌に「愛読者」がおり、誌面や愛読者会で交流がもたれ、独特の少女雑誌文化が生まれていく。

第4章では『少女の友』における音楽関係記事を分析、検討した。ここでは、音楽の知識が読者により大きく差があったであろうこと、読者集会のプログラムに唱歌や邦楽が多いことがわかった。次に、読者の作文について各音楽種目の出現傾向等を分析した。また、中心的に音楽を扱った作文の分析から、音楽イメージの考察を進めた。ここから、女学生は音楽という教科に熱い視線を注いでいたこと、近代教育制度のもとにある唱歌を内面化し愛好していたこと、琴は他の邦楽器に比して身近であること、洋楽器には鮮烈なイメージをもつが西洋音楽には未だ近しくないこと等が結論づけられた。

(コメント・熊沢彩子)

松原氏の発表は、明治・大正時代の音楽愛好家として、特に「女学生」に的を絞り、彼らの音楽生活の一端を明らかにする試みであった。そのために、「女学生」をめぐる当時の教育システムと、雑誌『少女の友』の投書欄や主催音楽会に対する考察を行っている。なかでも、投書欄の記述を対象とした詳細な分析は非常に興味深いものであった。フロアからは、対象となった時代の経年変化による影響、「女学生」以外の音楽嗜好との相違、唱歌の雑誌メディアそのものが読者である「少女」に及ぼした影響などについて質問があがった。今後は、『少女の友』以外の雑誌における研究をはじめ、教育システムからみた「女学生」と雑誌メディアを通した「少女」イメージを橋渡しする考察方法や、その他の帝劇や

宝塚、童謡運動など大衆文化全般との相互影響など、女性学、音楽学、社会学など他ジャンルに及ぶ新たな研究の掘りが期待できる。

○2007年度修士論文発表(その1)

1.現代日本の学校教育における

和楽器実技教育の可能性 ―箏を中心に―

クリコフ・マキシム(東京芸術大学大学院)

(発表要旨)

本研究の目的は、箏を日本という民族の固有音楽の楽器の一つとしてとらえ、学校教育におけるその学習の現状と今後の展望の可能性を考察することである。その中で、①和楽器教育を巡る諸問題の現状や解決方法を検討することと、②箏という楽器の音楽教育的な機能や可能性を探ることである。

1988年から現在に至るまで、学校における和楽器教育の諸問題に関してどのような論争や活動が行われていたかということ調べ、「なぜ和楽器教育が必要なのか」という根本的な問題を整理した。その際、茅原芳男と邦楽教育振興会の活動の検討も行った。

また、箏を対象に、和楽器教育を巡る諸問題を、①和楽器教育の実践に関する間接的なものと、②直接音楽の授業に関連する実践的なもの、という二つのグループに分けて整理と考察を行った。その①の中では、和楽器を扱う授業に対する音楽教師二つのタイプを見分け、箏の様々な用い方を分類し、和楽器の学習指導の計画作成のアルゴリズムの例を提案した。その②の中では、「日本の声」の指導の問題を具体的に分析し、箏の指導における唱歌(しょうが)の問題を批判的に考え、楽譜の問題を整理した。

以上は、ある程度既に解決されたものとして、楽器設備、楽譜の問題、指導計画作成の問題を示し、未解決のもの

して、指導者の能力や知識を指摘した。また、和楽器に関する音楽教師と生徒の関心のレベルが非常に大事な問題とされている。

以上の研究と音楽授業の参与観察の結果を踏まえ、音楽授業で、

1. 日本の伝統的な音楽の領域の内で用いられている箏
 2. 日本の伝統的な音楽の領域の外で用いられている箏
- の活用性や可能性について具体的に考察し、箏を扱ういくつかの実験を提案した。

箏を通して日本の伝統音楽文化を体験するために、短い学習ブロックを利用し、一つのブロックで一つだけの日本の伝統音楽文化の要素を取り上げることは一番効果的であるという結論をした。

(コメント・藤波ゆかり)

クリコフ・マキシム氏の論文は、現代日本の学校教育における和楽器実践指導の可能性について考察したものである。邦楽教育振興会会報の分析や実際の授業のフィールド・ワークを通して、音楽教師の教育実践から生み出された教育理念や目的、方法を取り上げた点に意義があると言えるであろう。質疑応答では、箏の普及と楽器商との関わりについての質問が出された。これに対し、マキシムは楽器屋と学校の間で楽器レンタルのシステムが東京都では活発に行われていると回答した。また、「短い学習ブロックを利用し、各ブロックで一つだけの日本の伝統的な音楽文化の要素を取り上げることが一番効果的」という論文の結論について「要素」の具体例について尋ねる質問があった。マキシムは、これに対し、間や掛け声、掛け合いなどの要素を挙げて述べた。地方における和楽器の供給や教育の状況、今後の課題についてなどを含め、今後の研究の発展に引き続き期待したい。

2. 出版物からみた箏の社会的位置づけ

—江戸期から明治期にかけて—
森田敬子(東京学芸大学大学院)

(発表要旨)

本研究は、「箏」という楽器が江戸期から明治期にかけてどのような社会的位置づけを持っていたのかということを出出版物から探るものである。

主として対象とする文献は往来物(特に「女子用往来」と『商売往来』)である。

往来物は鎌倉・室町時代から明治・大正期までに手習所用に書かれた教科書の総称である。もともとは進状・返状という一対の形で手紙のやりとりを収録し、初歩教科書として編集したものである。江戸期に入り、初等教育機関であった寺子屋が増えるに従って往来物も多く作られるようになる。寺子屋には武家の子女だけでなく庶民の子女も通っており、家業(土農工商)に合わせた往来物が生まれた。また往来物には挿絵として当時の日常が描かれており、内容は時代によって変化している。これらのことから往来物は当時の生活をうかがい知ることができる文献であるということがいえる。

往来物は現在、①古往来②語彙科③消息科④教訓科⑤歴史科⑥地理科⑦産業科⑧社会科⑨女子用⑩百人一首⑪理科⑫合本科という12種類の分類がなされているが、本発表で取り上げる往来物は「女子用」と、産業科に属する『商売往来』である。「女子用往来」と『商売往来』には「箏」のことが書かれている。「女子用往来」の中で多く読まれていた『女庭訓往来』『女今川』『女大学』『女小学』は1600年代から1700年代にかけて初出し、1800年代に多く再版されている。『商売往来』は1694年から1889年までコンスタントに再版本あるいは流布本、伝本が刊行されている。「箏」に関する具体的な記述内容は、「箏」の歴史や楽器の部分名称、行事における「箏」の必要性などであり、その内容は生活に密着

している。これらの内容と、出版・再版状況から、一般庶民の「箏」に対する認知度は高かったのではないかということが推察できる。

(コメント・福田千絵)

フロアからは、挿絵を扱うのであれば音楽図像学の注意点を考慮すべきという意見、出版部数について、研究目的の「社会的な認識」および「庶民」が具体的に指すものについて、再版に伴う挿絵の入れ替え、箏曲楽譜との関連についての質問があった。確かに、結論が研究目的に応えていない部分があり、また、挿絵についてももっと丁寧に掘り下げる余地があるように思われた。しかしながら、これまで取り上げられてこなかった往来物を中心に据えて考察し、発表したことは評価すべきであろう。発表者が、教育学と音楽学の橋渡しをしたと述べていたが、その通りであり、この点において音楽学にとって有益な成果であったと思う。教育学の先行研究を活用すればフロアの疑問も解決できるかもしれない。往来物は数がおびただしく、今回扱ったのはほんの一部であるということなので、今後、調査数を増やし、内容についても精度を上げられることを期待したい。

3. ロシア連邦サハ共和国の口琴ホムスの音楽

—演奏家の活動を通して—

山下正美(お茶の水女子大学大学院)

(発表要旨)

サハ共和国(首都ヤクーツク)は、サハリンよりもさらに北、東シベリアのレナ川流域に広がるロシア連邦の一共和国である。サハにはホムス x o m y c と呼ばれる口琴がある。

サハのホムス音楽はソ連が解体する1990年前後まで、ソヴィエト国外ではあまり知られていなかった。ソ連解体後、比較的自由に出国できるようになったホムス演奏家たちは、世

界各地のフェスティバルやコンサートに出演し、ホムス音楽は世に知られるようになってきた。

本研究は、こうしたホムス演奏家の活動状況を明らかにし、またそこから彼らがホムスとその音楽をどのようにとらえ、向き合い、考えているのかを明らかにしようとするものである。

おもに対象とした演奏家は、イヴァン・アレクセイエフ(1941-)とスピリドン・シシーギン(1950-)である。アレクセイエフの国内外に及ぶ広範な演奏活動は、ホムス演奏芸術の復興として高く評価されている。また彼は、1981年サハ共和国文化省に付属の養成所「ホムス」ができると、ここで指導にあたった。1988年にはホムスの演奏技法を15に体系化した。アレクセイエフのもとから、多くの若手口琴演奏家が育ち、次世代に大きな影響を与えた。さらに彼は、1990年世界民族口琴博物館の設置、1991年第2回国際口琴大会の開催など、サハ共和国文化省支援のもとで大規模な国家的事業にも深く関わった。アレクセイエフのホムスアンサンブルに参加し、ともに活動してきたシシーギンも、ホムスやホムス演奏家、ホムス製作者等に関する執筆活動を行い、2003年にはロシア語・英語で、ホムス演奏法に関する著書を出した。

ホムスの演奏では、楽曲の中で用いられるサハの民謡の旋律やサハ語の歌詞の伝達も重視されており、ホムス音楽を通して自民族文化を保持していこうとする考えもみられた。サハでは、ホムスの音楽が次世代に伝えられるべき重要な音楽文化の一つと考えられている。

(コメント・直川礼緒)

サハ民族の口琴ホムスの音楽を、サハを代表する二人のホムス奏者の活動をとおして考察するというテーマはよい。二人の、比較的古い著書(および関連文献)の一部の訳出・紹介にとどまらず、むしろソ連解体以後、演奏家達がどのような国に出かけ、どのような影響を受け、どのようにその音楽

が変わっていったか(例えば CD 作品の変化)、といった研究を今後期待したい。文献は、基礎資料として正確に訳出し、演奏法や音楽の分類等に関して、同筆者の同著書のサハ語版とロシア語版にみられるような食い違いや、実際の演奏と自著の記述との一見矛盾と思われる点など、自分なりの疑問を演奏者・筆者にぶつけ、反応を探る、といった方法も有効だと思われる。

サハの口琴音楽では「旋律」の認識とは、「歌詞」(声を出さずに歌詞のとおり口の形を変える)の認識による連鎖的なものである場合が多い。この点に関しても、注意を払う必要があると感じられた。

4. 学校教育における「世界の諸民族の音楽」を素材とした指導の研究

山口かおり(国立音楽大学大学院)

(発表要旨)

本研究は、学校教育における「世界の諸民族の音楽」を素材とした指導のあり方について提言することを目的としたものである。筆者が「素材」と示すことには、「世界の諸民族の音楽を」教えるのではなく、「世界の諸民族の音楽で」教えるという発想の転換における、「音楽学習において多様な関わり方が可能な、多くの要素を含む素材」と捉えて指導を行うという主張がある。

本論文は、4章構成となっている。第1章では、まず学習指導要領及び指導書における、「世界の諸民族の音楽」に関連すると思われる記述について、その変遷を概観した。そして「民族音楽」、「ワールド・ミュージック」、「世界音楽」といった関連する用語について、民族音楽学者の見解を援用しながら示すとともに、本研究における「世界の諸民族の音楽」を明確にした。第2章では、中学校音楽科における指導の実状を把握するために、平成3年～平成17年に検定済

の教科書(教育芸術社と教育出版)の「世界の諸民族の音楽」に関する記述について分析・考察し、また音楽之友社が発行している『教育音楽(中学・高校版)』の資料における「世界の諸民族の音楽」を扱った指導事例について、そのねらいや内容、形態等の傾向を分析・考察した。第3章では、生徒の興味・関心を高め、効果的な学習となる「素材」を探ること、また授業を行う際の方向性を見出すことを目的として、アンケート及び映像・音を用いて実態調査(中学2年生対象)を行った。第4章では、第1章からの総括として筆者のスタンスを明確にするとともに教育的意義を示唆し、また指導内容・方法における構想、さらに教材選択の視点を挙げ、「世界の諸民族の音楽」を素材とした指導のあり方を提言した。その中で、生徒の興味・関心を高め、効果的な学習となる教材の条件及び視点を以下の4点とし、結論付けた。

- ①現代性のある音楽(現代的にアレンジしたものや、現在流布している音楽)
- ②生徒の身近にある音楽
- ③生徒が共有できる(もしくは共有している)音楽
- ④「華やか」、「スピード感がある」、「リズムカル」な音楽

(コメント・加藤富美子)

おそらく、本論文は世界各地の伝統音楽をその音楽構造の特徴や表現特性に目を向けて指導することによって、生徒たちの音楽の世界を広げることができること、そのためには、方法として現代的にアレンジした伝統音楽を教材として用いることも意義があることを指し示したかったのではないかと思われる。教科書教材の分析や教育雑誌で取り上げられた実践の収集、分析など、世界の諸民族の音楽の指導の実際を現時点でとらえようとした意図は評価できる。しかし、当日の発表に限っていえば、用語、範疇、分類にこだわるあまり、発表資料中の「本研究における「世界の諸民族の音

楽」を「世界音楽」の概念とした。またそれを指導における視点に活かすとし、「世界音楽の視点からの指導」であることを主張した」という一文に見るように、用語に踊らされたかのよ
うな印象を与え、この研究を通して何を示したかったかが伝
わりにくかったのは残念であった。今後の研究ならびにその
発表方法に期待したい。

◆東日本支部第 37 回定例研究会

時 2008 年 4 月 5 日(土)午後 1 時 30 分～4 時 30 分

所 東京芸術大学音楽学部 5—301 教室

○2007 年度卒業論文発表(その 2)

1.イスラームの礼拝儀式的構造と音楽

—ウマイヤ・モスクのアザーンを中心に—

宮森庸輔(武蔵野音楽大学)

(発表要旨)

本研究では、シリア・アラブ共和国の首都ダマスカスに位
置するウマイヤ・モスクの礼拝儀式的構造と音楽について考
察した。なかでも本研究の主となる考察対象は、イスラーム
の礼拝の呼びかけアザーンである。アザーンは、ムアッズイ
ンと呼ばれる朗唱者によって、1日 5 回唱えられている。朗
唱される詩句はほぼ定句化されているが、詩句をのせて朗
唱される旋律については特に決まりはなく、ムアッズインに
よってさまざまな旋律が付けられている。通常は単独朗唱だ
が、ウマイヤ・モスクのアザーンは、基本的に集団で朗唱さ
れているまれな例である。

筆者のような外部の者にとっては、アザーンは音楽そのも
のに聴こえる。しかし、イスラームの世界では、アザーンは
音楽ではなく、宗教行為としてみなされている。そのためか、
アザーンの音楽的な実態については、今までほとんど研究

がなされていない。それが、筆者がウマイヤ・モスクのアザ
ーンの音楽様式を明らかにしたいと思った理由である。具
体的には、アザーンの採譜を行い、それをもとに旋律型、主
唱者と合唱者の関係、使用マカームについて分析し、その
結果を現地のムアッズインへのインタビュー内容と比較しな
がら、アザーンを6つの種類に分類した。その結
果、これらの6つの種類のアザーンは、朗唱される時、つま
り、礼拝時と密接に関係していることがわかった。また、ウマ
イヤ・モスクのアザーンは、礼拝につながる一連の礼拝儀
式の一部をなしている。アザーン朗唱の前後には、ウマイヤ・
モスク特有の旋律的詩句があり、それらの内容や名称につ
いても今回の調査で明らかにした。

現地調査は、2006・2007・2008 年の3度に分けて行った。
卒論執筆後に行なった 2008 年度の調査では、それまでの
調査結果とは異なる情報や、未調査部分の情報を得た。今
回の発表はその結果も含めた内容となっている。今後は、
現地でのインタビュー内容と筆者の採譜分析とがうまく一致
しないマカームについて再検討していきたい。

(コメント・濱崎友絵)

イスラーム世界において、礼拝時刻を告げるアザーンの
朗唱は、きく者を「音楽的」に魅了するが、これらは「音楽」と
はみなされていない。宮森氏の発表は、まずこの立場をふ
まえた上で、アザーンの音楽様式を解明することを目的にし
たものであった。氏は、シリアの首都、ダマスカスのウマイ
ヤ・モスクでのアザーンを具体的な研究対象とし、採譜によ
る音楽分析や朗唱者(ムアッズイン)へのインタビューなどの
質的調査をとおして、朗唱詩句と旋律の関連づけと分類化、
また各曜日と使用マカームの関連性等の明示を試みている。
インフォーマントより提示されたマカームについて、氏は自
身の分析結果と矛盾が生じていることを告白しているが、会

場で視聴した現地アザーンの集団朗唱をきいた限りでは、朗唱者が皆「専門家」であるとは考え難く、ムアズィンらの「音楽」教育背景なども調査、考慮に入れた上で、氏自身の分析結果との照合が必要だといえるだろう。とはいえ、先行研究が圧倒的に少ない中で、三回にわたる現地調査をおこない、アラビア語を読解し卒業論文としてまとめた成果を、まずは評価したい。今後の研究の深化を期待する。

2. 催馬楽の演奏伝承とその変遷について

—古譜と現行曲の音楽分析を通じて—

本塚 亘(法政大学)

(発表要旨)

催馬楽は千年余りの歴史を持つ音楽であり、現在でも宮内庁などで演奏されている。しかし平安期の催馬楽が今日に至るまで、そのままの形で伝承されてきたわけではなく、宮廷の興亡や時代の変遷の中、音楽的な変化を余儀なくされてきた。

応仁の乱後衰退していった催馬楽は、江戸時代になって数度復興が行われたが、音階やリズム構造に疑いの多いものであった。また復興以降も、その違和感を修正するために、新たな改変が塗り重ねられてきた。

本稿では、『仁智要録』、『三五要録』、『催馬楽略譜』を用いて、古製の催馬楽の音楽的分析を行った。また現行の催馬楽譜である『明治撰定譜』の「催馬楽歌譜」、「催馬楽箏譜」、「催馬楽琵琶譜」を用いて、同様に音楽的分析を行った。その後両時代譜を比較し、変化の具体的内容を明らかにした。

まずリズム構造の変化について分析した。三度拍子では「百」の位置に相違があった。対して五拍子では、小拍子間の伸縮が顕著であったが、その伸縮傾向にある程度規則性を見出すことができた。復興時には『仁智』、『三五』のように

拍子体系が明確に記された楽譜ではなく、『略譜』のような、拍子を曖昧にしか判断し得ない楽譜が用いられたと推察できる。

次に、古譜と現行譜における、音高分布、および音階構造の変化を調査した。「箏譜」、「琵琶譜」においては、多少の調絃の変化、音高分布の偏向があった。「歌譜」においては、その音高分布が示す音階構造そのものが変化している。その音階は近世邦楽の影響を受け、呂律ともに一つの音階に収束していったものと考えられる。

現在我々が聞くことのできる催馬楽は、再興時の「混乱」を解消するために、編曲(変曲)が繰り返され、時に楽器の調絃法や、楽器の構造までも変えてしまったものである。今後催馬楽の復元にあたるに際しては、このような不確かな伝承にとらわれず、より詳細な古譜分析によって行われるべきである。

(コメント・遠藤 徹)

催馬楽は平安時代に盛行した後、中世に中絶したため、現行伝承は江戸時代に復興されたものが基になっている。しかし復興以降も、現在まで変化なく安定して伝えられてきたとは言えないのが実態である。明治末に催馬楽の伝承(殊に呂)が既にあやふやになっていたことは、山井基清著『催馬楽訳譜』「まえがき」からもうかがわれる。本塚氏の発表は、催馬楽の演奏伝承の変遷を、平安時代から現代にいたるまで、音楽分析を通じて跡付けようとする意欲的なものであったが、少し課題が大きすぎるように感じられた。歌譜のみから声律を確定することは困難であり、現行の都節化した旋律、および律と不分明になった呂の旋律の上限は未だ明らかでないし、江戸期の復興の過程自体も必ずしも明確になってはいない。平安時代の実態、江戸期の復興の事情、復興以降(殊に明治以降)の変遷は、各々で探求すべき課

題が多く残されている。こうした実情に鑑みると、もう少し課題を絞って集中して研究を進めた方が成果が期待できるように思われた。

3. 革命現代京劇《紅灯記》の研究

荻野 珠(東京芸術大学)

(発表要旨)

本研究は、文化大革命が中国の音楽文化に与えた影響の一側面を、革命現代京劇《紅灯記》から明らかにするものである。(文革期すなわち 1966 年から十年間の、いわば革命プロパガンダとしての京劇作品を革命現代京劇といい、当時は革命現代京劇を主とした模範作品(样板戯)のみが上演された。現実的・写実的な舞台装置や扮装、共産主義革命的なストーリーが特徴である。)

論文の第一章では、革命現代京劇の成立の背景を概観した。次に第二章で《紅灯記》の成立の経緯、登場人物や物語の舞台、上演や流布の様子、評価、文革後の様子を明らかにした。さらにこれまで指摘されている音楽面での特徴を、《紅灯記》における具体例で洗い出した。すなわち使われる言葉、楽器、基本旋律とリズムをあらわす「唱腔」「板式」、流派や、オペラに範をとった西洋音楽からの導入などについてである。第三章では、「声とドラマ内におけるその役割」に焦点をあて《紅灯記》の分析を行った。これは、これまでに指摘されているさまざまな「要素の変更」だけでなく、「全体の構成」が革命現代京劇の“なまなましさ”を生み出しているのではないかという仮説によるものである。《紅灯記》における声の表現を①「台詞」「唱(歌)」、②「登場人物の心情を表す部分」「ストーリー」を進行させる部分、③「独白」「登場人物への語りかけ」「会話」に分類し、分析した。作品全体を俯瞰すると「ストーリー進行のための会話の台詞」の部分が多いことが明らかになった。また、「登場人物の心情」は全て「革

命に対する心境や決意」であり、全てが従来の京劇と同様に歌だけを抜き出して歌うという楽しみ方の残った「唱」によって担われており、プロパガンダとしての役割が重視されていることが伺えた。以上をふまえ、伝統京劇を旧中国の封建社会の文化として、西洋音楽を民主主義・資本主義の音楽として否定しつつ、両者の融合によりそのどちらでもないものを創り出すというコンセプトは、確かに新しい京劇作品を生み出したと結論づけた。

(コメント・尾高暁子)

革命現代京劇は、「智取威虎山」「砂家浜」「奇襲白虎団」「海港」「紅色娘子軍」と、今回の分析対象「紅灯記」を含む。発表者は声の表現に注目し、内容とスタイル別に唱(アリア)と台詞の使い分けを分析、また唱の長さ上演時間に唱が占める割合を割り出した。この今までありそうでなかった分析方法で、伝統劇よりコンパクトな唱が 1、2 分に1度は登場し、徹底的に肯定的内容(革命賛美)を歌う、という構成が見出された。これが恐らく革命京劇独特のテンポ感、観衆を飽かさぬプロパガンダの秘訣だろう。望むらくは、伝統京劇の唱がパフォーマンス全体に占める割合との比較がほしかった。発表を聴きつつ、この分析方法が他演目にもあてはまるのか、従来の板式原理(基本旋律を拍子・テンポ面で変奏する)をどの程度踏襲したのかという興味もわいた。なお会場からは、「洋楽と伝統劇の融合例は他にもあるのか」「2 旋法(西皮・二簧)はどう使い分けられるのか」ほかの質問がよせられた。

4. 英米における能受容の変遷

山下 暁子(お茶の水女子大学)

(発表要旨)

本論文は、英米の能研究における、能の紹介、伝播、そし

て受容という展開の様相をまとめることを目指したものである。英米の研究者によるもので、能受容の流れを形成する役割を果たしたと予想される文献を対象としている。

第1章では、能受容の流れを概観するため、19世紀末からの諸文献についてまとめた。第2章では、それまで主に文学作品として紹介されてきた能を、「パフォーマンス」として、つまり、実際に演じられるものととらえて書かれたと考えられる文献を取り上げた。Frank Hoff(Foff)と Willi Flindt による *The life structure of Noh*(1973)、Monica Bethe と Karen Brazell による *NŌ as performance: An Analysis of the Kuse Scene of Yamamba*(1978)、Monica Bethe と Richard Emmert による *Noh performance guide*(1992~1997)の3つの文献を具体例に、最近の研究について内容と特徴、翻訳手法、レイアウトなどの面から考察した。

今回の研究で明らかになった点は大きく2つある。

まず、舞台芸能としての能と、文学作品としての能という能の二重性に注目すると、諸研究者が何に重点を置いているかを読み取ることができる。文献として総合的なものを目指す場合は、より洗練された記述方法が求められる。

また、英語能という実践の背景には、能をパフォーマンスとしてとらえる認識へのシフトがあると考え、そのきっかけの一つは、小段理論であると予想した。

国文学を中心に発展してきた日本での能研究だけでなく、外国での研究も見ること、日本において能に対する再認識が促されることが期待できる。今後、そういった形で新しい発見が生み出されてほしい。

(コメント・早稲田みな子)

本論は、国外の研究者による能の研究に注目した点で非常にユニークである。日本芸能の研究における学問的基盤や視点は日本と国外では異なり、その違いを認識することで

日本における研究にも新たな可能性が広がるであろうという発表者の見通しには、大いに賛同する。発表では「パフォーマンス」としての能に注目した「今日の中心的」文献として三点が取り上げられ、特に翻訳手法の問題が論じられた。そのうち『能への誘い』は日本で能を鑑賞する外国人のために国立能楽堂より出版されたもので、他の研究書と同列に扱えるのか疑問が残った。また『能への誘い』が1990年代の出版であるのに対し、他の2点が1970年代の出版であるのも気になった。英語能という実践がなぜ生まれたのかという疑問が今回の研究の出発点となったということだが、その答えを得るには能の上演そのものの受容についても研究する必要があるだろう。今後の研究の発展に期待したい。

○2007年度修士論文発表(その2)

1.1980年代末の中国におけるポピュラー音楽ブーム

「西北風」に関する研究

陳 琳(東京学芸大学大学院)

(発表要旨)

「西北風」(1986~1988)は中国の伝統音楽、特に西北地域の固有の音楽要素と西洋のロックを結合したものの、いわゆる中国民謡化ロック音楽ということになる。その作風は1986年の《一無所有》、《信天遊》で定着した。本論文の目的は聴衆の美の価値観の変化など、「西北風」誕生の背景を明らかにし、社会雰囲気にも大きな影響力をもった「西北風」の音楽に関する考察から中国のポピュラー音楽における伝統音楽の役割を明らかにすることである。

「西北風」とは文化、芸術界における歴史を反省し、自民族のルーツを探るとい背景のもとに誕生したものである。経済発展とともに、地域格差、拝金主義などの問題が生じ、国民の改革開放に対する情熱が失われたことも「西北風」が生まれた原因のひとつだと思われる。「西北風」はマス・メディ

アを通して、全国的に広がり、再び中国の伝統文化を重視させ、聴衆の美の価値観や生き方を変化させ、大きな反響を呼んだ。同時に国民に社会的責任感をもつように促した。

「西北風」の音楽の特徴については、中国の五音音階の使用、リズムの律動の重視、西洋音楽の機能と声の利用、「叫ぶ歌唱法」の導入が挙げられ、中国のポピュラー音楽に対して、中国伝統音楽の要素が不可欠な役割を担っていることを指摘した。電子楽器、ドラムセットと中国の伝統楽器の使用したことも、聴衆にインパクトを与えた。歌詞の内容、題材は現実性、時代性を重視するようになった。「西北風」の誕生が、時代の要求に合致していたと推察した。

「西北風」をきっかけに、中国のポピュラー音楽の創作は、香港・台湾といった枠から離れ、再び中国の伝統文化を重視させるよう方向付けたといえる。「西北風」の研究を通し、中国のポピュラー音楽の発展において、中国伝統音楽の要素が重要な役割を果たしてきたことがわかった。

(コメント・尾高暁子)

発表の骨子は、1980年代後半の中国を席卷した「西北風」の再解剖である。が、発表者の挙げた音楽的特徴と歌詞内容、西北風出現の背景、創作者と享受者層の整理方法、結論は、先行研究を簡潔にまとめた半面、既視観は否めなかった。このうち筆者が興味をもったのは、享受者層に、従来説の都市不満分子(知識青年や頑主)だけでなく、社会的に優遇される大学生も加えた点である。ノンポリで自己中心的な彼らに西北風(の歌詞)が社会性を促した、という仮説的結論は、実体験を持つかつての大学生に多数インタビューを行えば、説得力を増しただろう。西北風の背景として、発表者は文学、美術、映画、経済の4要素を併置した。これに対し、改革開放の停頓と地域格差という社会矛盾が、音楽(西北風)や美術、映画、文学、テレビドラマなど各メディア

であい前後して噴出し、社会現象を形成した(A. F. Johns *Like a Knife: Ideology and Genre in Contemporary Chinese Popular Music*)という見方もあげておきたい。

2. 黒川能の現代史研究

柴田真希(東京芸術大学大学院)

(発表要旨)

本研究の主題は、国指定重要無形民俗文化財である黒川能の現代史を「見る／見られる」というまなざしの相互関係に基づきながら記述することである。

黒川能に向けられたまなざしとして、黒川の周辺地域である櫛引町、鶴岡市、山形県、東京を想定した。新聞記事、雑誌、町広報の言説を上記のまなざしに分類、検討することによって、各々のまなざしがどのようなもので、各々がどのように影響し合っているのかを検討した。上記の方法に加えて、当事者たちへのインタビューを行い、黒川能の現代における一連の出来事が当事者間にどのように内面化されているのかということについても記述した。尚、当事者へのインタビューによって記述される事柄も、それは当事者の一部を描くことでしかないということを前提としている。

具体的には、昭和26年から現在までを黒川能の現代と定め、昭和26年から昭和42年までを第Ⅰ期、昭和46年から昭和60年までを第Ⅱ期、平成6年から現在までを第Ⅲ期とした。今回は上記の中から、まなざしの相互関係が見受けられる事例について発表する。

平成6年、黒川能では「蠟燭能」が開始され、当事者による手作りのイベントとして、現在も多くの観客を全国から集めている。本発表では、「蠟燭能」とは第Ⅲ期以前に当事者が出張公演を数多く経験する中で当事者間に芽生えていた黒川能らしさの追求と、外部において作り上げられてきた「本当の黒川能」のイメージが合致した場であるということを指摘す

る。また、当事者へのインタビューを紹介することにより、当事者が外部での反応を感じ取り、自らの伝承を構築している様子を紹介する。

すなわち、黒川能の現代史とは黒川能側と外部が相互に関連を持ちながら形成されてきたものである。つまり、黒川能の当事者たちは外部の反応とのやりとりの中で自らの伝承活動を構築しているのである。本研究は黒川能の現在を読み解くための一助となると同時に、民俗芸能を実際に演じる当事者(内部)と社会(外部)の関係性の在り方を考える上での一例となるとして結論とした。

(コメント・森田都紀)

本発表は、黒川能(国指定重要無形民俗文化財)の現代史を「見る／見られる」という相互のまなざしに基づいて論じようとする。昭和26年から現在までを「現代」とし、これを3つの時期(昭和26～42年、昭和46～60年、平成6年～現在)に区分して、出来事を丹念に整理した。そして、新聞や雑誌、町広報、などから関連記事を拾い出し、櫛引町、鶴岡市、山形県、東京、におけるまなざしの実態と影響関係を検討した。そして、黒川能の伝承は現在、当事者の抱く黒川能らしさと、外部が抱く「本当の黒川能」といったイメージとを合致させる方向で構築されていることを、映像を用いながら示した。フロアからの質問には、各地におけるまなざしの具体的な違いについて、伝統行事の王祇祭で行う演目の種類と近年イベント行事として定着した「蠟燭能」で行う演目の種類の違いについて、演技の質の変化について、演技の質の変化に対する当事者の意識について、などがあがり、関心の高さが窺えた。

3. 明治初期の横浜居留地における音楽演奏の場

—横浜ゲーテ座を中心に—

橘川友里(お茶の水女子大学大学院)

(発表要旨)

明治初期の横浜居留地には「横浜ゲーテ座(The Gaiety Theatre)」という外国人居留者によって建てられた劇場があった。この劇場は1870年(明治3)12月に開場し、演劇、音楽、礼拝、集会など様々な目的に使用され、1923年(大正12)9月の関東大震災で倒壊するまで横浜居留地の人々の社交の場となっていた。

様々な催物の中でも演奏会の数は多く、本研究では劇場初期の15年間に行われた演奏会を取り上げ、これらを大きく次の3種類に分類し、調査研究を行った。一つ目は、横浜居留地の外国人居留者(アマチュア)による演奏会、二つ目は、海外から来日したプロの音楽家による演奏会、三つ目は、海外から来日したプロの(喜)歌劇団による公演である。ちなみに、海外の(喜)歌劇団が日本で初めて公演を行ったのがこの横浜ゲーテ座であった。これらの演奏会や公演は、当時の横浜居留地で発行されていた新聞に頻繁に取り上げられ、広告のみならず、演奏や聴衆の様子についても詳しく記載されている。そのため、この新聞記事を主な資料とし、上記の3種類それぞれについて、演奏者、プログラム、演奏及び聴衆の様子という観点から調査し、当時の横浜ゲーテ座における音楽演奏の様子を明らかにした。

調査研究により、横浜の外国人居留者(アマチュア)による音楽演奏が大きな役割を担っているのではないかと考察に至った。多くのアマチュア演奏家たちは演奏会を度々開催し、様々な演奏形態で音楽を楽しんでいた。聴衆にとっては退屈な演奏もあったようだが、中にはプロ並みの腕前を持つ者もあり、人々に受け入れられていた。そして、横浜はこのように音楽活動の活発な土地柄であったため、海外のプロの音楽家が横浜ゲーテ座で演奏会や公演を行ったのではないだろうか。

横浜ゲート座は外国人居留者のための劇場ではあったが、明治初期の日本において非常に活発に洋楽演奏がなされた貴重な場であった。

(コメント・葛西 周)

本発表は横浜本町通りゲート座における演奏活動について、各演奏会の概要と聴衆の反応を整理したものである。

質疑では、ゲート座での演奏活動が当時の日本の音楽界にどのような影響を与えたのかが問われたのに対し、そこでの定期的な洋楽演奏活動は日本に洋楽が普及する契機を作った、という意見が発表者より述べられた。国内外の他の居留地における演奏との関連性についての質問には、他の居留地も含めた演奏会場の一つとしてゲート座を訪れた演奏者もいた、という説明がなされた。

アマチュア演奏家に着目した点は興味深いのが、全体的にやや資料整理・事例紹介に終始した感が否めない。分析の軸を明確化し、それに伴い演奏活動の分類方法を再検討する余地があるといえる。また、他の演奏機会や類似施設との比較などから、明治初期という時代性や社会状況の中に「場」を位置づけることも可能であろう。今回の調査で明らかになった事例をどのような理論的枠組みに基づいて論じていくかが今後の課題となるだろう。

4. 仙台藩能楽史における金春大蔵流について

田村にしき(東京芸術大学大学院)

(発表要旨)

テーマは、「仙台藩能楽史における金春大蔵流について」である。江戸前期の仙台藩では、金春流と喜多流をシテ方とする能が行われていたが、江戸中期(1700年代)の五代藩主吉村の時に「金春大蔵流」が創設された。「金春大蔵流」とは、「風土に合う能を」という理念で創設した仙台藩独

自の流派で、伊達一門、一族の藩主や武士達に広く浸透し、明治維新まで盛んに演能された。

本論文の目的は、「金春大蔵流」について、流派の創設の歴史、流派独自の謡本の節付や型付、現在でも唯一「金春大蔵流」を伝承している登米能(宮城県登米市)から、総合的に資料を整理し、その実態を明らかにすることである。

本論文は、3章構成である。

第一章では、三原良吉「仙台藩能楽史」(1958)により、伊達政宗の時代からの藩主と能の関わりを概観し、その中で、五代藩主吉村の時代に、能楽が最も盛んに行われていたことを確認した。そして、五代藩主吉村が「金春大蔵流」を創設した経緯や、「金春大蔵流」の宗家に任命された桜井家の系譜を明らかにした。

第二章では、「金春大蔵流」の謡本と型付を取り上げて調査した。対象にしたのは、主に、平賀善政作、桜井彼面^{かのも}安明^{やすあき}節付^{すりあげ}《摺上》の謡本と、《松嶋》の謡本と手数附(共に伊達文庫所蔵)である。《摺上》と《松嶋》は、仙台藩の中でも秘曲の能とされ、習うには神文血判を取らなければならなかったこと、「金春大蔵流」太夫の桜井家で、相伝され、大切にされていたことを指摘した。

第三章では、現在でも唯一「金春大蔵流」を伝承している登米能について、資料の調査や、フィールドワークを行い、現在の伝承実態を明らかにした。

(コメント・森田都紀)

本発表は、江戸時代の仙台藩における能の伝承について、仙台藩で独自に創設されたシテ方金春大蔵流に焦点を当てて、その音楽的実態を解明しようとする。地方能楽史研究において、音楽研究はまだ十分とは言えない状況であるが、発表者は現存する謡本や型付などの音楽資料を分析して、仙台藩の音楽伝承の特徴を導き出そうとした。また、

江戸時代からの伝承を残しているとされる登米能(宮城県登米市にて伝承)にも着目し、登米能の現行伝承から江戸時代の仙台藩の伝承を遡って推測しようとした。フロアからは、現存する仙台藩関係の音楽資料は少なくないことを考えると、音楽分析に用いた謡本や型付の数が限定的と言えないか、との意見があがった。これについて発表者は、音楽資料の成立状況が特に明白な資料に限ったため限定的な分析になったと答えた。今後、資料調査の範囲が広げられ、より詳細で慎重な分析が発表されることを期待したい。

定例研究会発表募集

東日本支部では会員の皆様による活発な研究活動のため定例研究会での研究発表等を募集しております。発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、それぞれの締切期日までに東日本支部事務局までお申し込みください。

◇第40 回定例研究会

2008年12月6日(場所未定、発表希望締切9月末日)

◇第41 回定例研究会

2009年2月7日(場所未定、発表希望締切11月末日)

会員の声 投稿募集

1. 次号締切: 2008年10月20日(11月初旬発行予定)
2. 原稿の送り先および送付方法:
学会本部事務所(郵送、Fax またはメール)
〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル 307号
Fax: 03-3832-5152 E-mail: LEN03210@nifty.com
3. 字数および書式: 25字×8行以内(投稿者名明記のこと)

4. 内容:会員の皆様に知らせたいと思う情報

(1) 催し物・出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、書籍出版、展示、見学会など、会員の皆様に知らせたいと思う情報。

(2) 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望。

* 原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただくことがありますので、ご了承ください。

(東日本支部だより担当)

発行: (社)東洋音楽学会東日本支部

編集: 塚原康子、尾高暁子

近藤静乃、前原恵美、熊沢彩子

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

東京芸術大学音楽学部楽理科 塚原研究室気付

Tel: 050-5525-2357・2350 Fax: 050-5525-2522

E-mail: tsukahar@ms.geidai.ac.jp(塚原)
